

# 今年も授業で「ベルマーク」学習

千葉・みどりが丘小



(写真左)「みんなでベルマークを集めるぞー」  
(写真右上)ベルマーク運動を紹介した映像を見る子どもたち  
(写真右下)財団職員に次々と質問が繰り出されました

千葉県八千代市立みどりが丘小学校(内藤俊夫校長、児童数494人)で、ベルマーク財団の職員を招いてインタビューする授業がありました。3年生の総合的な学習の一環で、約70人が参加。さまざまな質問が飛び出しました。

同校では、人前で話し、相手の言うことを理解して協力する力を身につけることを目指し、昨年度の3年生から、ベルマーク運動について学んでいます。今年度も本や資料、財団のホームページなどで調べて質問項目を作成。「ベルマークのふしぎ大発見!～世界の友だちを助け隊～」という学習のタイトルも自分たちで考えました。

授業があったのは7月5日。まず財団制作のDVD「未来を育むベルマーク」を上映しました。ベルマーク運動がハンディを負った国内外の学校を支援する身近な社会貢献活動であることなどを紹介する内容で、子どもたちはメモをとりながら熱心に見ていました。

続いてインタビューです。元気よく手を挙げて次々と質問する児童らに、財団の職員2人が答えました。

——ベルマークではどんなものが買えますか?

学校で使うものならほぼ何でも。ニワトリやウサギといった動物は買えないけれど飼育小屋ならオーケーです

——外国にもベルマークはある?

自分の学校だけでなくハンディを負った学校の役にも立つという、日本と同じような仕組みのものはないようです。でも、タイでベルマーク運動を導入しようという動きがいま進んでいます

——ベルマークのキャラクターは「りんちゃん」以外にもいますか?

りんちゃん、ベルマーくん、ママベル、パパベルの4人が「ベルマークファミリー」です

「マークの最高点は」という質問で、「い

まは100～200点ですが、1990年代には英語教材で2400点のマークもありました」と答えると、「えー」という驚きの声があちこちであがりました。

1時間半の授業を終え、子どもたちには財団のピンバッジとシール、スタンプがプレゼントされました。財団に電話して講師の派遣を依頼するという大役を果たした高橋美詞(みこと)さんは、「電話した時は新体操の発表会より緊張した」そうです。「きょう財団の人のお話を聞いて、ベルマークが世界の困っている人たちの役に立っていることなどがわかり、すごくよかったです」。

また、恩珂呼蘭(えんけ・こらん)さんも「ベルマークはいろいろな人がうれしくなるような運動だということがわかりました。これからもたくさん集めたいです」と感想を話しました。

子どもたちは夏休み前に手分けして他学年の15クラスをすべて回り、学んだことを発表してベルマークの収集を呼び

かけました。

みどりが丘小は2010年からベルマーク運動に参加、これまでに約34万点を集めて備品類を購入してきました。でも活動の中心は保護者会なので、児童らの関心は低かったそうです。こうしたことも、昨年度からベルマークの学習を始めるきっかけになりました。昨年のインタビュー授業後の夏休みには、3年生の児童が母親と一緒に東京・築地の財団事務所を見学を訪れ、ベルマークについて自由研究にまとめました。

瀬口朗子(あきこ)教頭は「子どもたちは授業中だけでは時間が足りず、帰宅してからもネットで調べるなど、とても意欲的に取り組んでくれました。自分で学んだことは忘れません。学習を通じて得た経験や知識をこれから生かしてほしい」と期待しています。

## ベルマークで「自由研究」を

小学生の財団見学相次ぐ

夏休みに入り、自由研究の課題としてベルマークについて学びたいと、小学生のお子さんを連れた財団見学希望が相次いでいます。

東京都新宿区立鶴巻小学校2年の岩崎莉歩さん連れてきた母親の奈緒さんは、4月からPTAのベルマーク委員だそう。「なぜベルマークを集めるのか、どんな事に使えるのかを、子どもたちにも理解してもらわないと」。莉歩さんもマークの切り取りを手伝っているようで、「いつもベルマーくんみたいにハサミで切ってるよ」。段ボール箱が並ぶ倉庫に興味津々の様子。「いっぱいマークが届くのに、時間をかけて数えてすごいなと思いました。学校みんなにも教えてあげたい」。

中野区立平和の森小学校2年の御法川樹(いつき)くん連れてきた父親の修さんは、最初は8月20日

ずの見学を希望していたのですが、「そんなに遅くでは間に合わない」と奥様に言われ、急遽、日程を早めました。「僕らのところは宿題や自由研究は休みの後半までやらなかったのに…」と修さん。樹くんは事前にしっかり準備し、職員を質問攻めにしていました。

また同区立桃花小学校からは、5年の山口り子さん、妹で2年生のれいさん、り子さんのお友だちで5年の山田りおさんが、り子さんの母親浩代さんに連れられてやってきました。財団の倉庫は通常は2人体制で仕事をしていると聞き、みんなびっくり。り子さんは運動そのものへの質問に加え、「ベルマークの仕事をしていてよかったことは?」などと職員の意識についても質問。また、りおさんは「検収の仕事はとても細かいけれど、慣れたら楽しそう」と感想を話してくれました。

